



2025年（令和7年）

3月号（No. 958）

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

45年間のヒマラヤでの調査研究・ 教育支援活動を振り返る

秩父宮記念山岳賞受賞者 酒井治孝

一本の映画がきっかけでヒマラヤの虜となった小学校時代。将来の進むべき道を地球科学と決めた高校時代。3年間の青年海外協力隊での活動を経て大学で本格的に取り組んだヒマラヤの地質調査・研究と、ネパールの子どもたちへの教育支援活動——。少年の日の夢から始まった、ヒマラヤでの45年間の回想する。

私のヒマラヤ研究の出発点は、小学3年生のときにクラス担任の先生に引率されて見に行った、イタリア隊による1954年のK2（8611m）初登頂の記録映画でした。白銀に輝く峻険で秀麗なヒマラヤの虜になると同時に、難攻不落に見えるヒマラヤの高峰も、入念な準備と科学的トレーニング、強い意志とチームワークがあれば登頂できることにいたく感動しま

した。そして、自分も将来、必ずやヒマラヤの8000m峰に初登頂することを心に誓いました。しかし、残念ながらヒマラヤの8000m級の処女峰は、64年までに全て初登頂されてしまい、パオニア・ワークとしてのヒマラヤ初登頂の夢は霧散してしまいました。小学校高学年から中学校の理科の授業で、地球の歴史は岩石や地層、化石の中に隠されている

目次

45年間のヒマラヤでの調査研究・ 教育支援活動を振り返る	1
第3回「ナンダ・デヴィ縦走」を開催	5
「偉大なるエベレストの謎」と 日本山岳会との関わり	6
今年の植村直己冒険賞は吉田勝次さんに 国内外での未踏の洞窟探検活動を評価	8
追悼	9
山の名著再読	10
東西南北	12
活動報告 図書委員会	13
図書紹介	14
第79回ウェストン祭のお知らせ	15
会務報告	16
ルーム日誌	16
会員異動	17
INFORMATION	17
新入会員	18
編集後記	19

▶ 日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月～金 10～20時
第1、第3、第5土曜日 10～18時
第2、第4土曜日 閉室

ことを知り、ヒマラヤ初登頂に代わって、ヒマラヤ山脈形成史の研究に憧れるようになりました。ヒマラヤ研究は巨大な象に蚤が取り付いたようなもので、一生かかってもその秘密は解明できないと思うと、一層やりがいを感じるようになりました。

高校時代には将来進むべき道を地球科学と決め、大学では地質学を専攻しました。そして、大学院では、難解な日本列島の土台がどのようにして形成されたのかを解明する研究に取り組みました。博士課程に進学し、室戸岬や都井岬などを対象に研究を進め、成果を学会発表し、博士論文の執筆



タンセン地方で地質調査中の筆者。1981年1月、川の
中州に設営したドゥムレ・キャンプにて

に取り掛かっていました。しかし、このままだと大陸の地質を見ることなく一生、日本列島の研究に埋没するのではないかと危惧していました。そんな気持ちを抱いて、日本青年海外協力隊に応募し、大学院を休学してネパールに行くことになりました。この決断が私の人

生の大きな転換点となりました。

ネパールに派遣され、講師と地質調査の二足の草鞋

80年4月に協力隊から国立トリブバン大学に派遣された私は、理工学部地質学科の講師として3年間勤務しました。1年のうち猛暑期と雨期の半年間は修士課程（日本の学部レベル）の学生に講義と実験・実習指導を行ない、乾期の半年間は国土開発（道路・電源開発や防災）のための地質調査に従事しました。調査対象としたのは、

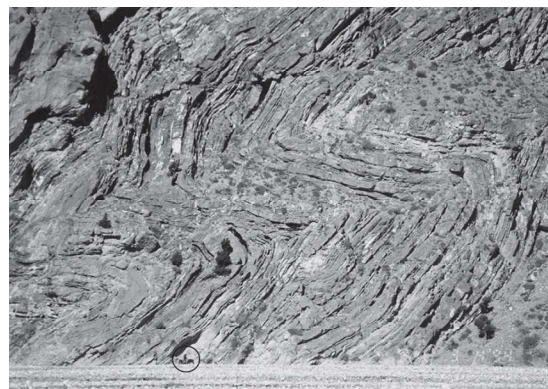
ヒマラヤの中で最も人口密度の高い、1000～3000m級の山々から成るレッサー・ヒマラヤ地帯でした。河川・沢沿いにコンパスを使って簡易測量しながら、1・5000のルートマップを作成し、そこに地質情報を書き込み、そのデータを総合的に編集して1・6万3360（1マイルを1インチに縮尺）の地質図を作り、対象地域の地質の成り立ちや地質構造を説明していききました。

1回の調査行は1ヶ月前後でしたが、この間は沢の合流点付近にキャンプを設営し、3～4日ごとにキャンプを移動しました。調査

をする地質屋は私1人で、コック1人とポーター数名の総勢5人ほどのチームでキャンプを運営していました。食事は毎日変わらず、ダル（豆汁・バート（ご飯）・タルカリ（野菜煮）で、調査中の行動食としてチャパティ（薄く円型に焼いたパン）を4枚ほど携行しました。煮炊きは大きな石を3つ並べて、薪をくべただけの簡易竈で行ないました。

私は日本でネパール語の研修を受けられなかったので

（大学で教えるので英語研修のみ）、カトマンズ到着後、私的に学校の先生からネパール語を習っていました。そのお陰で、ポーターや村人とは片言のネパール語で話すことができました。結局3年間のうち丸々1年は山での調査生活を送ったことになり、ネパール語は上手くなっていました。その調査の結果、カリ・ガンダキ河流域のバルパ（タンセン）地方の60×30kmの面積の地質図を完成させることができました。私が命名した地層名と地層の順序・年代は、現在では国際的スタンダードとして使われています。

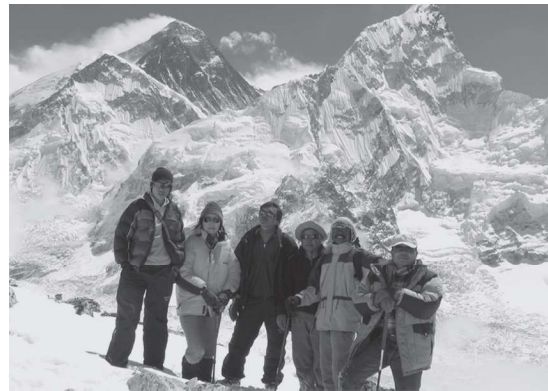


横臥褶曲したジュラ紀の石灰岩層。○印は馬に乗っている人で、スケールの大きさが分かる。1984年11月、タコーラにて

テレビ番組制作にも協力し、ヒマラヤ誕生の謎を探る

幸いなことに、帰国後40年余りにわたって大学でヒマラヤの研究・調査を継続することができました。また、ヒマラヤやチベットに関するテレビ番組の企画・取材に協力して、10本余りの番組制作のお手伝いできました。

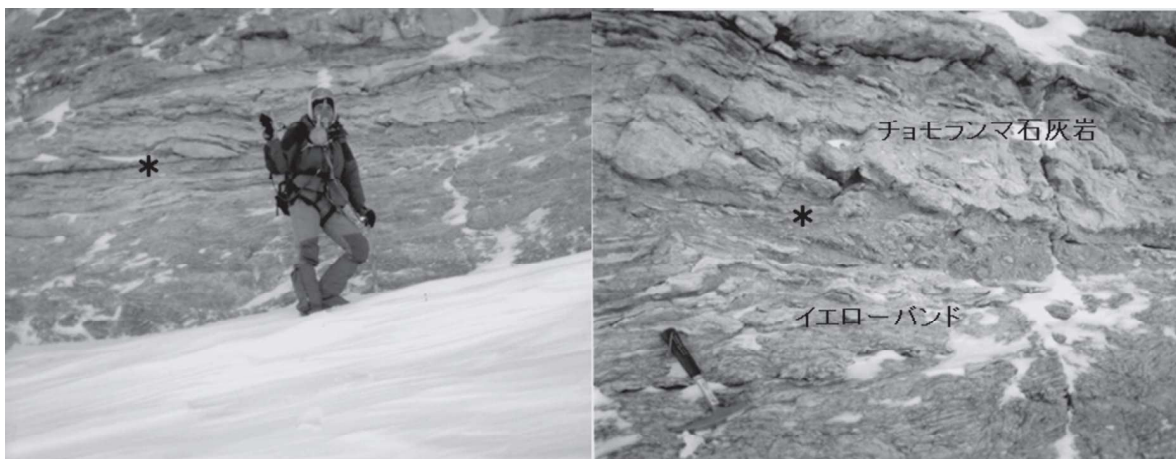
どの番組も好評でしたが、記憶に鮮明に残っているのは、NHKの「地球大紀行・巨大山脈の誕生」とTV朝日の「チョモランマの渚」です。実はNHK内部で「巨大山脈ヒマラヤ」の企画が始まったので



エベレスト（左）とヌプツェを背景に調査隊員とポーターたちと一緒に記念撮影。2006年3月、カラパタールにて

すが、文化遺産の「シルクロード」制作と違い、ヒマラヤのどこにどんな被写体があるのか皆目分からず、手探り状態だったのです。そこで地質学者の私に白羽の矢が立ち、85年の春と秋2回、ネパール各地の地質学的に重要な現場を案内して撮影しました。

番組のハイライトは、ヒマラヤ山中でアンモナイトを発見するシーンでした。残念なことに撮影前日に雪が降り、山肌は見事に雪で覆われてしまいました。化石発見は難しかったのですが、幸運なことに巨大なアンモナイトを発見することができました。この番組は



エベレストの北面、第1ステップの基部(約8512m)を走るデタッチメント断層(*印。変成帯からチョモランマ石灰岩を引き剥がした断層)を発見。1998年5月

好評を博し、放送後、漫画やビデオも制作・販売されました。

一方、「チョモランマの渚」のタイトルは、拙著『ヒマラヤの渚』(近代文芸社、95年)に由来しています。私は91年から92年にかけて、神奈川県立「生命の星・地球博物館」に展示するために、ヒマラヤの岩石の採取を依頼されました。その岩石は「ヒマラヤ山中の漣の化石」と「酸素を生み出した藍藻類の化石であるストロマトライト」の壁、各々10m×5mという途方もないものでしたが、そもそもこの2つの岩石は、私が「地球大紀行」の番組で紹介したものでした。このプロジェクトでは、石工が乗ったトラックが谷底に転落するなど大変苦労しましたが、首尾良く採取でき、現在は博物館とその庭に展示されています。その顛末を書いたのが『ヒマラヤの渚』でした。「チョモランマの渚」の企画では、エベレストに登頂

し、頂上とその下のイエロー・バンドの岩石を採集し、その中から古生代前期の約4・6億年前の化石を発見し、かつてヒマラヤが浅海の渚だったことを視聴者に分かってもらおうという、これまた壮大なプロジェクトでした。

98年春、50日余り取材班とともにチベット側から登山を行ない、登頂した澤田隊員によってサンプルを採取できました。帰国してプレパレートを作成し、首尾良く三葉虫をはじめとする化石を顕微鏡下で発見することができました。さらに山頂の非変成の石灰岩とイエロー・バンドの間に大断層を発見し、イエロー・バンドは400℃余りの熱によつて変成し結晶質石灰岩となっており、その熱年代学的研究から2400万年くらい前に上昇を始めたヒマラヤの変成帯は、1440万年前ごろには地表に出ていた可能性を指摘することができました。

人材育成がネパール発展の鍵。優秀だったボーターの子孫たち

私は協力隊の隊員として、開発途上国の中でも特に貧しいネパールに3年間住んで、混沌としたネ

パール社会の中で仕事をするという稀有な体験ができました。その日常生活の中でいつも考えていたのは、「どうしたらこの国が貧しさから脱却し、豊かになれるだろうか?」ということでした。

何がこの国の財産なのかを考えました。その結果、財産の一つは水資源、もう一つは観光資源、そして、三つ目は人的資源という結論に達しました。世界一の包蔵水力を使つて電源開発や灌漑施設の整備を行ない、世界一高いヒマラヤを観光の目玉として外貨を稼ぐ、そして、国民全員が教育を受け、国の発展を担う人材を育成する。この3つが肝要だと思いました。

これらの中でも人材育成がネパールの発展の鍵を握っていると思う、帰国後は微力ながら次のような教育支援活動を行なってきました。(1)大学を卒業した理工学分野の優秀な学生を日本に留学させて、博士の学位を取得させる。(2)応用・土木地質学分野の研修を日本で受けられるように仲介する。(3)6つの学校校舎を建設し、教育施設(理科実験室、図書室、コンピュータ教室など)の充実を図る。(4)優秀な成績を取った学生と、意欲はあ

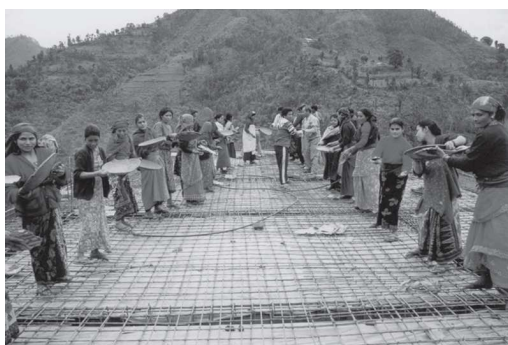


2015年の大地震後、仮校舎の前に集まった生徒たちと先生。前列で首にハタクを巻くのが筆者。2016年11月、ジュンベシ村にて

るが貧しい家庭の学生に奨学金を贈る、などです。

これまで10人以上の学生が工学・理学・農学博士の学位を得てネパールに帰国し、活躍しています。また、地質学科の大学生が、冬休み中の生徒のいない校舎に2週間ほど寝泊まりし、地質学野外実習を継続してやっています。これまでに建設した2つの校舎を利用して、3000人以上の学生がこの実習を受けました。また、2015年の大地震によって倒壊した、標高2800mにあるジュンベシ中学校を再建しました。

最後に、私のささやかな教育支援によって大きく成長した、ポー



タンセン地方ドゥムレ村に建設中の校舎の屋根にコンクリートを流す作業は、雨期に村人総出で行なわれた。2000年6月

ターのインドラ・バードルとその子どもや孫の話を紹介しましょう。彼は生まれてこの方、靴やサンダルを履いたことがなく、いつも裸足で荷物を担いで歩いていました。足の裏は厚く硬くなってヒビ割れていました。寒い冬でも短パンとシャツだけで、夜テントの中で寝るときは麻袋を被って寝ていました。性格は明るく、知らない人でも誰にでも声を掛け、ロキシ（ネパールの焼酎）を飲むと上機嫌で歌を唄っていました。

自分の名前だけはネパール語で書けますが、それ以外は読み書きができませんでした。猫の額ほどの土地でトウモロコシや麦、野菜

を作っていました。それだけではとても家族を養えず、ポーターや道路工事の人夫、粉挽きなどの仕事をやっていました。

しかし、息子と娘は学校に行かせていました。7年生になる息子ゴパールが私のキャンプを訪ねてきたときには、英語で書かれた私の地形図が読めるのに驚きました。そこで私は、「10年生の学校を卒業し、卒業資格試験に合格したら大学に行きなさい。私が奨学金を出してやるから」と言いました。

それから4年後、日本の私に彼から手紙が届きました。その中には「卒業資格試験に合格し、現在ポカラの大学で勉強しています。ご存じのとおり我が家は貧しいので、奨学金を出してくれませんか」と書かれていました。そこで毎年、奨学金を贈っていたところ、「教育学部を卒業し、難関のネパールの電電公社に就職できました。今は大学院修士課程に進学し、働きながら勉強しています」という手紙が届きました。

その上、妹のスリジャナも教育学部に合格したことを知り、彼女にも奨学金を贈ることにしました。卒業後、小学校の先生をやっていた

ましたが、「村の医療の役に立ちたいので、保健婦の養成所で2年間勉強したい」と言っていました。そこで友人と2人で奨学金を出していたところ、2年後に手紙が届き、「30人の受験者の中で私を含む3人が合格しました」と言ってきました。現在は学校の先生をやりながら、小さなクリニックで保健婦として働いています。

その後、この兄妹の子どもたち4人も、私と友人の奨学金を得てインドやオーストラリアの大学院で学び、海外でエンジニアやシニア看護師として活躍しています。現在は母校の貧しい学生たちのために彼らがお金を出し合って、奨学金制度を設けています。

彼らの成長は、家が貧しくても機会があれば大学で学び、知識と技術を身に付け、豊かな生活ができることを物語っています。校長先生は「皆、ゴパールに続け!」と生徒たちを励ましています。このように私が蒔いた種は、少しずつですが確実に成長しています。今後とも微力ながら村の発展と教育の質の向上のために、活動を続けていくつもりです。

（京都大学名誉教授）